

チートスキル『暴食』で最強&飯テロセカンドライフを満喫します！

# 異世界ぽちゅり無双

空戯ケイ illust. Nyansan

vol. 2



Chubby Hero's  
Reign in Another  
World

## ナターリヤ

弓を武器に戦うエルフの少女。  
魔素の流れを視ることが出来る。  
穏やかな性格だが、  
ちょっぴり気弱な一面も。

## わいちゃん

コロネがとある場所で  
出会ったもふもふドラゴン。  
意外な口調が  
チャームポイント。

## コロネ

異世界に転移したぼっちゃり女子。  
カロリーを魔力に変えるスキル  
「サタン・カロリー」  
『暴食の魔王』で、  
絶品グルメを満喫しつつ、  
異世界を冒険していく。  
でも魔法を使いすぎると痩せて  
しまうようで……。

## イリア

王都に暮らすパティシエで、  
アリアの双子の妹。  
姉に比べると大人しいタイプで、  
お菓子作りが大得意。

## アリア

王都に暮らすパティシエで、  
イリアの双子の姉。  
持ち前の明るさで、  
いつもイリアを  
引っ張っている。

◆ 主な登場人物 ◆

## プロローグ 復活しちゃう、ぽっちゃり

あくる日の朝。わたしは宿屋の一室で不敵な笑みを浮かべていた。

目の前に鎮座するは、備え付けの姿見。

立つ者の全身を映す縦長の大きな鏡の前で、わたしは両手を広げて高らかに宣言する！

「――わたし、完・全・復・活っ!!」

姿見には、ぽっちゃりボディのわたしの体が映っていた。

わたしこと牧心寧は普通の女子大生だった。だが一週間ほど前、食事の最中に食べ物を嘔を詰まらせて死んでしまい、異世界に転移することになった。

そこで、『暴食の魔王』という、摂取したカロリーを魔力に変換して、自分がイメージした魔法を発動できるという、チートスキルを手に入れたのだ。ただ、デメリットとして一気に魔力を消費しすぎると体内の脂肪が強制的に燃やされてスリムボディになってしまうという副作用がある。

先日起きた『幻の果実』採取クエストにおけるマッドブラッディッリーとの激戦の中でカロリーを使い過ぎたことで、意図せず激痩せスタイルに変貌を遂げてしまったのは記憶に新しい。

魔力の使い過ぎには注意が必要だと今回の件で身に沁みて理解したよ。

「うんうん、やっぱりこれくらいの包容力がないとね！ スリムボディも良かったけど、やっぱり

わたしといたらこっただよね！」

恋しさすら覚え始めていた懐かしさのぼつちやり姿を手にして安心感に包まれる。

かつてはダイエツトをしようと思ったけど、やっぱり長年付き合ってきたこの体型は実家のような落ち着きがあった。

「ふるーん!!」

「おお、サラも喜んでくれてるのかな？ 心配かけちゃってごめんね！ でももうこれで元通りになったよ！」

足元の床でわたしの従魔であるスライムのサラがぼよんぼよんと跳ねていた。

全力で喜びをアピールしてくれているようだ。

「体型に戻るまでどれくらいかかるか分からなかったけど、一週間くらいで元通りになれて良かったあ。まあ、ここ最近はずっとベルオウンの街で食べ歩いてただけだったし、当然と言えば当然かな？」

ちよくちよく簡単なクエストに行ったりもしてただけど、ほとんどベルオウンの美味しい料理を味わっていただけの生活だった。そこで、わたしはパーティメンバーを思い出す。

「そう言えばナターリヤちゃんは……ああ、今日も朝イチから一人でクエストに行ってるんだっけ」

ナターリヤちゃんは、エルフの新米冒険者である。

頑張り屋さんのナターリヤちゃんは朝から一人でできるクエストをこなすのが日課になっている

ようだ。

わたしがベッドの中でぐーすか寝てる頃には、すでにナターリヤちゃんは支度を済ませて冒険者ギルドに向かっているというわけである。……なんかちよつと罪悪感が。

そろそろわたしもナターリヤちゃんと一緒に魔物討伐のクエストでも受けてみようかな？

「ナターリヤちゃんはいつも頑張ってるもんね。わたしの体型も戻ったことだし、久しぶりに何かしらクエストでも受注しに……」

——ぐううううううう!!

……行こうかと思っただけど、わたしのお腹がストップをかける。

やっぱりしっかり朝食を取ることは大事だね！ 腹が減ってはなんとやらって言うし！

今日も美味しい焼き鳥を頬張りに行きつけのお店『クックドワードウルドゥ』に行っちゃおっかな？

「さあて、それじゃあ今日も朝から腹を満たしにいきますか！」

「ふるーん！」

サラと一緒に楽しい朝食を味わうべく、早速出発の準備を整えていると——バン！ と荒々しく部屋の扉が開けられる。

「——コロナお姉ちゃん！ たいへーんっ!!」

「うええ?」

「ふるん?」

突如飛び込んできた幼い女の子の可愛いらしい大声に、わたしとサラはすつとんきような声を上げてしまう。一体誰かと思つて扉の方へ振り向くと、そこには息を切らした様子のパーティーメンバーの姿があった。

「ナ、ナターリヤちゃん!? 一体どうしたの!？」

ただ事ではなさそうな様子のナターリヤちゃんに駆け寄る。

ちなみにコロネというのは、異世界でのわたしの呼び名だ。

ナターリヤちゃんは、乱れた息を整えてバツとわたしの顔を見上げた。

「あのね! 領主のアルバート様がコロネお姉ちゃんを呼んでるから、今すぐ一緒に冒険者ギルドまで来てほしいの!!」

「……………え?」

ナターリヤちゃんは小さな体から声を振り絞る。

突拍子もないそのお願いに、わたしはポカンと疑問の声を漏らした。

## 第一章 ギルドから指名を預けちゃう、ぽっちやり

わたしはストックしておいた焼き鳥をつまみつつ、ナターリヤちゃんと冒険者ギルドに向かう。そして到着した冒険者ギルドの受付に行くと、受付嬢のお姉さんに奥の部屋へ案内された。

ギルドの廊下を進むと、現れたのは大きな木製の扉。

コンコンとノックをして開けた——瞬間、明るい声と共に誰かが抱きついてきた。

「——お待ちしておりましたー!! コロネさーん!!」

「ぐわあっ! つて、オ、オリビア!？」

盛大にハグをしてきたのは、この街の領主の娘のオリビアだった。

先日の『幻の果実』採取クエストをわたしに頼んできた依頼主だ。

そのクエストを無事達成した結果、こうして以前にも増して懐かれてる。

「ナターリヤちゃんもお久しぶりです! 先日の『幻の果実』の打ち上げぶりですな!」

「お、お久しぶりですっ! で、でもいつの間にオリビア様はここに? さ、さつきナターリヤが来た時はいなかったのに…………!」

「つい先ほど、コロネさんがいらっしやると聞いたので遊びにきました! あ、そちらにはサラちゃんもいるじゃないですか! こんにちは!」

「ぶるんっ!」

オリビアはわたしに抱きつきながら、ナターリヤちゃんとサラにも挨拶をした。

最初会った頃は清楚で理知的な子だなと思つていたけど、今は十代半ばのエネルギーを真っ直ぐぶつけられているような感覚だ。

苦笑しながらオリビアのハグを受け入れていると、不意に芯の通った力強い声が響く。

「ぶっ、よく来たな。コロネ」

「あ、どうも……この数日で完全に回復したみたいですね、アルバートさん！」

声の主は、来客用のソファに腰をかける、この街の領主のアルバートさん。

いやらしくない程度に貴族の品位を示す高級そうな衣服を身にまとい、領主らしい威厳ある雰囲気であつた。

ただ、実はアルバートさんの顔を見ると少し胃がキリキリとする。

この街の領主と対面しているがゆえの緊張というのもあるけど、不安の種はもう一つあつた。わたしは思いきって、自身の不安を打ち明けてみる。

「あのー、アルバートさん。この前の『幻の果实』を採ってきた後の打ち上げで、わたし失礼なことでして……？　まさかアルバートさんが来ると思わなかったからビックリして不敬な態度を取っていたんじゃないかと心配になって……」

具体的には、立ち居振舞いや言葉遣いなど。特に言葉遣いに関しては自信がない。

あの時は勢いでタメ口で喋ってしまったんじゃないかと思う。

その場で誰も咎めてくる人がいなかったのと、わたしもお酒が入ってハイになってたせいかな直ぐぐらくらい失礼なことをしかしたか記憶が曖昧なのだ……！

もしかして今回アルバートさんから呼び出されたのはその件に関する処罰なのではと恐れていたんだけど——当のアルバートさんは笑い飛ばすように手を振った。

「ん？　ああ、そんなことか。別にコロナなら構わんぞ。というより、俺の命の恩人なんだから、もっと気楽に接してくれと何度も言っているだろう？」

「そ、そうは言いません……」

「貴族が出席する公的な集いや上流階級の社交場ならばともかく、少なくともプライベートでは俺にタメ口でも問題はないぞ。文句を言ってくる奴がいたら、俺が許可していると言い返してやればいい」

「そうです！　しつこく絡んでくるようなら、私に言ってください！　よく理解できるように、たつぷりと『お話』をさせていただきますので！」

アルバートさんとオリーブアに続き、同じくソファに座る大柄のおじさんが一喝するようにムキムキの腕を組んで唸る。

「フンッ！　アルバート本人が良いと言っておるのだから深く気にする必要もないだろう。過剰な敬意は時に相手を傷つけるものだぞ、コロナ」

「レスターさん」

この冒険者ギルドのギルドマスター——レスターさんが、低い声音で告げた。

そ、そういうものなのかな？

思い返してみれば、レスターさんはアルバートさんに対してもフランクに接しているよね。

てか、普通に「アルバート」って呼び捨てにしている。おまけにタメ口。

まあ、そこまで言ってくれるなら、わたしも肩肘張り過ぎないようにしようかな！

「じゃ、じゃあちよつとだけ気を抜いて話すようにするよ！」

「うむ。ぜひそうしてくれ。コロナに畏まられると寂しい気持ちになっちゃってしまっからな」

気さくに笑い飛ばすアルバートさんの懐の深さに感謝しつつ、わたしは本題を切り出す。

「それで、わたしを呼んでるって聞いたんだけど、何かあったの？」

「ああ、その件なんだが。実はとあるクエストを頼みたくてな」

「やっぱりか……！ やれやれ、今度は一体どんな怪物を倒してこいと？」

「レスターさんが眉間に皺を寄せ、わたしを睨んだ。ありや、そんな嫌そうな表情してた？」

「そう案ずるな。今回のクエストは魔物討伐の類いではない」

「今回はもっと穏やかな依頼だそうですよっ！」

「オリーブアもそう言うが、もしかして今さら薬草採取でもやらせるつもり？」

「依頼主が到着したら話を進めよう。もうそろそろやつてくる予定なんだが……お、噂をすれば」

「アルバートさんが、わたしの背後にある開きっぱなしの扉を覗き込むように小さく顎を上げた。

その視線を追うようにわたしも後ろを振り向く。

と、この部屋に向けて歩いてくる二人の男女の姿が見えた。

○ ○ ○

「——初めまして。私は商人のドルートと申します。此度はアルバート様のご厚意でこのような場を設けていただき、感謝のしようもございません」

「妻のジェリーナです。本日はどうぞよろしくお願いいたします」

ギルマスの部屋に通された二人の客人が並んでソファに座り、礼儀正しく頭を下げた。

彼らの対面に、アルバートさん、オリーブア、わたし、ナターリヤちゃんの順で座っている。ちなみにサラはオリーブアの膝の上で大人しくしていた。

わたしの右斜め前の席、上座に位置する場所に腰を下ろしたレスターさんが先陣を切るように答える。

「このギルドのギルドマスターを務めている、レスターです」

「本日はわざわざご足労いただき申し訳ない。名乗るまでもないかもしれないが、領主のアルバートだ」

「娘のオリーブアと申します」

「レスターさんとアルバートさん、そしてオリーブアの自己紹介の流れに乗って、わたしも会釈した。

「初めまして、コロネです。冒険者をやっています。よろしく願います。あ、この子はわたしの従魔でスライムの、サラです」

「ぶるんー！」

「ナ、ナターリヤです！ コロネお姉ちゃんと一緒のパーティで冒険者をやっています！」

わたしたちの自己紹介に、ドルートさんとジェリーナさんにはこりと微笑んだ。

「これはご丁寧ありがとうございます」

「ありがとうございます」

改めて二人をよく見てみると、どちらも質が良さそうな服を着ていた。

ドルートさんは四十代のちよつと小太りなおじさんだけど、裕福ゆふくそうなオーラが感じられる。対してジェリーナさんはすらつとした体型で、ドレス風の衣装がよく似合っていた。ネックレスや指輪アズキマリなど装飾品も美しい。

ジェリーナさんは……見た目が若々しいからいまいち年齢が分からないけど、だいたい三十代半ばくらいかな？

「それで、レスター様。私たちの依頼の件なのですが……」

ドルートさんが控えめな口調で切り出した。レスターさんが頷うなずきで返す。

「うむ。ドルート殿どののご依頼だが、最適の冒険者を召集した」

「そうですか！ では、もしやこの方が例の凄腕冒険者の方ですかな!？」

ドルートさんがいきなり目を輝かせてわたしの方に向き直る。

ジェリーナさんも柔和にやわな笑みを崩さず、じつとわたしたちを眺めていた。

状況を掴つかめないまま進んでいく話はなしに、さすがに待ったをかける。

「あ、あの！ まだどんな内容のクエストか聞いてないんですけど、わたしたちに一体何をやらせるつもりですか!？」

「おや、まだご説明はされていないので？」

ドルートさんがそう尋ねると、レスターさんが答える。

「コロネもつい先ほどこの場に到着したばかりでしてな」

「そうでしたか。それでは恐縮ですが、依頼主である私の方から説明させていただきます」

ドルートさんはソファに座り直し、ごほんせまほらと咳払いをした。

そして、明快な口調で告げる。

「レスター様が太鼓判たいこばんを押された新進気鋭しんしんきえいの凄腕冒険者であるコロネ様には——私とジェリーナを王都まで護衛ごゑいしていただきたいのです!」

「ご、護衛、ですか？」

オウム返しするわたしに、ドルートさんはくりと頷うなずいた。

「はい。先ほども申しましたが、私は商人として。商売や仕入れのために定期的に王国各地おちむに赴おもむいているのですが、私が営いとなむ商会は王都にあるのです。此度は仕入れのためにベルオウンまで訪れたのですが、行きの護衛を担当してくれた冒険者パーティはすでにこの街を離れておりましてな」

ふむふむ。

「それで信頼がおける冒険者の方はいらつしやらないかと探していたところ、アルバート様のご厚意でレスター様に取り次いでいただいたのです。そして、今こうしてコロネ様とお話をさせていただいているというわけでございます」

なるほど。

つまりわたしにベルオウンから王都までの帰路の護衛を依頼したいということか。

話は分かったけど……なんか大層な肩書きがくつついてなかった!？」

「あの、ちなみにですけど、わたしを『凄腕冒険者』だとか言うのは……」

「実力・信頼共にレスター様が太鼓判を押してくださった、新進気鋭の冒険者だとお聞きしてお

ります！ 内々の情報ですが、先日はあの『幻の果実』の採取クエストまでも軽々と達成されたとか」

いや、たしかにそうだけばさ！

まだ冒険者になって一週間そこらの人間が背負うにはちよつと勇気がいる肩書きだよ！

「ちなみにだが、オリビアもよくコロネの武勇伝を自慢げに話し回っているな」

「オリビア〜？」

「うぐう！」

アルバートさんの告発を受けて隣に座るオリビアにジト目を向けると、細い肩をビクンと跳ねさせた。

そっぽを向いて下手つぴな口笛を吹くオリビアにため息を吐きつつ、ドルートさんに向き直る。

「ドルートさん。わたしはそんな凄腕の冒険者かどうか分からないんで、あんまり期待しすぎないでください」

「はっはっは！ またまた、ご謙遜を！ ねえ、ジュリーナ」

「うふふふ、面白いご冗談ですこと」

「いや謙遜でも冗談でもないですからね!」

当の本人であるわたしが否定しているっていうのに、ドルートさんとジュリーナさんは上品に笑い飛ばした。

くそう！ 二人共わたしの話を聞きちゃいないな!?

わなわなと震えるわたしに、ドルートさんが微笑みながら口を開く。

「いやはや、普段の護衛依頼はAランク以上の冒険者パーティに頼んでいるのですがねえ。なかなか信頼のおける冒険者が見つからずでして。高ランクで質が良いパーティに指名依頼を出す価値が張るのですが、やはり命には代えられませんからな」

護衛代金をケチって中途半端な冒険者を雇った結果、魔物に襲われて死んじゃったら本末転倒だもんね。

ん？ ていうか……Aランク以上？

「ちよ、ちよつと待ってください！ わたしAランク冒険者じゃないですよ!? それどころか多分、最低ランクのペーパーなんですけど!」

アイテムボックスからギルドカードを取り出す。

ランクの項目には、デカデカと『G』の文字が刻まれていた。冒険者ランクとしては、最低である。なんせ『幻の果実』採取クエスト以降は大したクエストを受けてないからね！

全然誇ることにゃないんだけどさ！

「ああ、そう言えばコロネのギルドカードを更新できていなかったな。ちよつと借りるぞ」

レスターさんはわたしからギルドカードを受け取ると、立ち上がって執務機の横に置かれた水晶玉にかざし、何やら操作をし始めた。

何をしているんだろう？

「きつとコロネお姉ちゃんのランクを上げてくれてるんじゃないかな？ ナターリヤも、Eランク

に上がったんだよ！」

ナターリヤちゃん自身は自身のギルドカードをわたしに突き出した。

ランクの項目には、たしかに『E』と刻まれている。

「すごいじゃん！ 頑張つてクエストに励んでた甲斐があったね！」

「えへへ、ありがとうコロネお姉ちゃん！」

ナターリヤちゃんははにかみながら笑った。あらかわいい。

すると、レスターさんが戻ってきてギルドカードを返却してきた。

『『幻の果実』の件ではバタバタしていたから後回しになつていたが、今ようやくコロネの冒険者ランクを上げることができたぞ。ほれ、確認してみろ』

「えっと、わたしの冒険者ランクは……C？」

渡されたギルドカードには、『C』のランクが刻まれている。

最初はGランクだったから……一気に四つもランクが上がったのかな？

『『幻の果実』採取クエストの貢献度を鑑み、上げられるところまでランクを上げておいた。本来ならばSランクを与えたいところだが、Bランク以上の階級は特別な試験をクリアしなければならん決まりでな。評価に不満はあるかもしれないが、今はこれで許してくれ』

「まあ、別にSランク冒険者になりたいわけでもないからそれは別にいいんだけど……それでもまだAランクには届いてたくない!？」

Gランクから一気にCランクまで駆け上がったのは凄いことかもしれないけど、依然としてAラ

ンクには足りない。

「お気になさることはございませんぞ、コロネ様。確かにランクは重要ですが、私はランクだけを見て雇う者を決めるほど愚かでもありません。あなたの多大なる功績と実力はすでに伺つております。レスター様だけでなく、ベルオウンを取り仕切る領主のアルバート様からも高く信頼されている冒険者——このような方を蔑ろにする理由がどこにございましょう」

黙つて話を聞いていたレスターさんが、フンツと鼻を鳴らした。

「そもそも、高ランク冒険者に依頼を出したいだけなら、ここよりもっと適したギルドがあるだろう」

「……ああ、〈獅獣の剛斧〉か」

ベルオウンの街を拠点にする高ランク冒険者をまとめ上げているギルド——〈獅獣の剛斧〉。

その部分だけ聞けば優良ギルドなのかと勘違いしてしまうけど、実態は真逆だ。

たしかに実力はあるけど、在籍してる冒険者の性格が終わつている。

わたしに集団で喧嘩を吹っ掛けてきたり、幼気なナターリヤちゃんから報酬の分け前を横取りしたり、他にも迷惑行為が多数報告されているらしい。

わたしが口にしたギルド名に、ドルートさんも眉をひそめた。

「〈獅獣の剛斧〉の存在は私たちも知っていますが……正直あまり好きません。冒険者として実力はあるかもしれませんが、それだけです。護衛依頼を出せるほどの信頼は置けません」

ドルートさんは残念そうに首を振った後、スツと真剣な眼差しでわたしと目を合わせる。

「私はこれでも商人の端くれ。今まで様々な人間を見てきました。前情報だけでなく、こうして実際に対面した結果、コロナ様は信頼関係を結ぶことができる方だと確信しました」

「ですから、いかがでしょうか。私たちの護衛を引き受けてはくださりませんか？」

ドルートさんに続き、奥さんであるジェリーナさんも懇願するような瞳で見つめてくる。

その真つ直ぐなお願いにわたしが言葉を詰まらせていると、隣のナターリヤちゃんが小さく口を開いた。

「コロナお姉ちゃん。この護衛依頼、受けてもいいんじゃないかな？」

「ナターリヤちゃんは大丈夫なの？」

「うん！ 誰かの護衛をするのは初めてだけど、ナターリヤひとりじゃないし、コロナお姉ちゃんもいてくれるならきつと無事に護衛依頼を完遂できると思うよ！」

ナターリヤちゃんは笑顔でぐつと拳を握った。

わたしは少し考えた後、結論を出す。

「……分かりました。それじゃあわたしのパーティで、ドルートさんとジェリーナさんの護衛依頼を受けさせていただきます！」

わたしの返答に、ドルートさんが身を乗り出す。

「おおっ！ 本当ですかコロナ様！」

「ありがとうございます！」

嬉しそうな笑みを浮かべる二人に、改めてパーティメンバーを紹介しておく。

「わたしのパーティは、わたしを含めて三人です。この子がパーティメンバーのナターリヤちゃん、加えてこっちがわたしの従魔のサラです。ドルートさんとジェリーナさんの護衛はこの三人で受けさせてもらおうかと思っっているんですけど、問題ないですか？」

「勿論ですとも！ ぜひ皆様のお力をお借りできますと嬉しく思いますぞ！」

「それじゃあ、契約成立ってことで」

わたしはドルートさんと握手を交わす。ここに護衛依頼の契約が締結された。

「あ、それとわたしのことは様づけで呼ばなくていいですよ。なんか慣れないですし」

「ふむ、そうですか。それではコロナさんと呼ばせていただいても？」

「じゃあ私はコロナちゃんって呼んじゃおうかしら？」

「はい、それで大丈夫です！」

「あ、あの、ナターリヤもコロナお姉ちゃんと同じように呼んでもらえると……！」

ナターリヤちゃんのお願いにも、ドルートさんとジェリーナさんは笑顔で頷いて了承してくれた。やっぱりナターリヤちゃんも様づけで呼ばれるのは気になるんだね。

「ところで、ドルートさんたちは今から王都に戻るんですか？」

「はい。すでに馬車は用意しておりますので、いつでもベルオウンを発つことは可能です。ああ、もちろんコロナさんのパーティの方々が必要な準備を整えるまでお待ちいたしますので、ご安心ください」

「そうですか。わたしは特に準備はいらないけど……」

「ナターリヤも、必要な道具はずっと持ち歩いてるから今すぐ出発できるよ！」  
「ふるん！」

ナターリヤちゃんとサラも準備はバツチりみたいだ。

「皆すぐに出発できるみたいなので、早速ですけど今から王都に向かいますか？」

「おお、それは助かりますな！ 馬車は冒険者ギルドの近くの停留所に停めてありますので、後ほどそちらへご案内いたしましょう。では、レスター様」

「うむ。それではコロネへの指名依頼の発注書を記入していただくよう」

レスターさんが一枚の羊皮紙をテーブルに滑らせ、ドルートさんが慣れた手付きでさらさらと必要事項を記入していく。すると、不意にアルバートさんが立ち上がってソファの後ろに回り、わたしの背後から耳打ちしてきた。

「……コロネ。ギルドを出る前に少しいいか」

「え、どうしたの？」

アルバートさんが神妙な面持ちで、促すようにくいつと顎を部屋の端へやった。

ついてこいつてことかな？

わたしはアルバートさんに倣って立ち上がり、部屋の端っこまで向かう。

そこでアルバートさんはわたしにだけ聞こえるくらいの小声で告げた。

「〈獅獣の剛斧〉のギルドマスター——ダルガスについてなんだが、どうにも奴がコロネの素性を探っているらしい。しかも相当ご立腹だそうだ」

「えっ！」

〈獅獣の剛斧〉のギルマスがわたしを!?

そ、そんな……！

〈獅獣の剛斧〉に睨まれるような行動なんて心当たりは………めっちゃあるな。

〈獅獣の剛斧〉所属の冒険者を何人かぶっ飛ばしたし。

ナターリヤちゃんを〈獅獣の剛斧〉所属の冒険者パーティから救出する時も、リーダーの男の腕をへし折れる寸前まで握ったりした。

まあ、アイツらがロクでもない行動をするから、こちらもお返しをしてあげたまでだ。

アルバートさんは小声で続ける。

「恐らく、ダルガスが憤慨しているのは先日の『幻の果実』の件だろう。あのクエストを達成したコロネがどんな人間なのか嗅ぎ回っていると耳にした。ここ数日、このギルドにも探りを入れて何度か訪れているらしい。その度にレスターが適当にあしらって追い返しているそうだが……」

「あー、怒ってる理由ってそっちなんだ。てっきり冒険者をぶん殴った件の報復かと思っただよ」

まあ、どっちにしてもわたしが悪く言われる筋合いはないんだけどね。

そう言えばダルガスも『幻の果実』を入手してて、『幻の果実』を渡す代わりに商業ギルドの実権を寄越せ」というような横暴な交渉を持ちかけてたんだっけ？

ダルガスの良い噂は聞かないし、どうせその交渉が失敗したことに逆ギレしてわたしを糾弾しようとしてるんじゃないの？

「コロネのことだから力ずくで言うことを聞かせられるということは心配していないが、ダルガスは何をしてくるか分からない。しばらくは身の周りに気を付けておくことだな」

「……面倒くさいことになってるなあ。でも、分かったよ。一応気を付けておくね。わざわざ教えてくれてありがとう、アルバートさん」

アルバートさんはボンツとわたしの肩を叩き、優しく笑う。

「なに、大したことじゃないさ。護衛依頼、頑張ってくるといい。ドルート殿に気に入られると色々と便宜を図ってもらえるようになるだろう。それに、せっかく王都に行くんだし、観光をしてくるのもいいかもな」

「観光かあ——たしかに、それいいかも！」

王都観光か！

この数日でベルオウンの街にはちよつと馴染んできたから、新しい刺激を得るためにも王都を観光して回るのは楽しそうだ。

しかも一人じゃなくてパーティメンバーもいることだしね！

「コロネさん！ お父様となにをコソコソ話してるんですかっ！」

「え、あー、別に大したことじゃないよ？」

「そうぞオリビア。ちよつと依頼回りのことでアドバイスをしてやっただけだ」

部屋の片隅で二人で話していたわたしとアルバートさんに、ほっぺを膨らませて可愛く嫉妬するオリビア。

わたしたちがソファ席に戻ってオリビアをなだめていると、ちよつとドルートさんが発注書を書き終えた。

「それではコロネさん方、私たちが停めてある馬車まで案内いたしましょう」

「こちらですわ」

ドルートさんとジェリーナさんに先導される形で、わたしたちは部屋の扉に向かう。

「はい、よろしくお願います！」

「よろしくお願いますっ！」

「ぷるん！」

「コロネさん！ 王都までの護衛、頑張ってくださいね！」

「うん、ありがとうオリビア。帰ったらなにかお土産でも買ってくるから楽しみにしてて！」

オリビアは嬉しそうに、ぱあつと笑う。

アルバートさんとレスターさんにも挨拶をして、わたしたちは部屋を出た。

観光も楽しみだけど、まずはドルートさんとジェリーナさんを安全に王都まで送り届けないと！

「——突然舞い込んできた護衛依頼だけど、気を引き締めて臨むでしょう！」

己に気合いを入れ、わたしたちは冒険者ギルドを後にするのだった。

## 第二章 護衛を遂行しちゃっ、ぼっちゃり

「こちらが、私の馬車になります」

ドルートさんは停留所の奥に停めてあった馬車の前で止まった。

その馬車は結構大きめで、頑丈な素材で作られている。馬車を牽いている馬も立派な毛並みと優れた肉体美を併せ持っていて、めっちゃイケメンだった。

「……ん？ あれ、おい！ もしかしてコロネじゃねえか!？」

「あ、コロネ殿！」

ふと、大通りの方からわたしを呼ぶ声が飛んでくる。

反射的にそちらを向いてみると——そこには見知った冒険者仲間がいた。

「デリックにレイラ！ 二人共どうしてここに!？」

二人とは異世界に転移した後すぐに知り合って、今も仲良くしている。

「俺たちは手頃なクエストでもないかと思っただけでギルドに行く途中でよ」

「それよりもコロネ殿、こちらの馬車は……」

「ああ、ついさっき護衛依頼を受けたんだ。ちょうど今からベルオウンを出発するところ」

わたしの返答に、デリックが顔色を変えて詰め寄ってくる。

「護衛依頼!? ってことは、他の街に行くってことだよな!？」

「う、うん。王都まで行くけど」

「ちえー、コロネだけズリイぞ！ 俺だつて王都に遊びに行きてえのによお！」

「いや、一応仕事だからね、これ」

「ぶーぶーと愚痴をこぼしているデリックの耳を、ぐいっとレイラが引っ張った。

「情けなく文句を垂れるな。仮にもリーダーなんだから、もう少しシャキッとしろ！」

「い、いででで！ わ、悪かったよ！ もう愚痴らねえから離してくれ!!」

ギブアップを全力でアピールするデリックを無視したレイラが、わたしに向き直る。

「仕事に向かう途中で邪魔をしまして申し訳ない。王都までの護衛依頼、ぜひとも頑張っつてほし」

「ありがとう！ 帰ったら二人にも王都のお土産買ってくるね！」

「ふふ、それは楽しみだ。ナターリヤ殿とサラ殿も、怪我はしないよう気をつけて」

「ま、まあコロネがいるから大丈夫だとは、お、思うけどよ！ ナターリヤとスライムも頑張れ……って、いででで!!」

「あ、ありがとうございます！ ナターリヤも、コロネお姉ちゃんの助けになれるよう、精一杯頑張ります!!」

「ぶるるん!!」

レイラはナターリヤちゃんとサラの返答に満足したように微笑むと、デリックの耳を引っ張った

まま踵を返す。

「それでは、私たちはギルドに向かうとしよう。ほら、行くぞデリック」

「わ、分かったから、いい加減手え離してくんねえ!」

ぎゃーぎゃーと喚くデリックの騒々しい声が小さくなっていた。

そして、わたしはハッと背後に意識が向かう。

「あ、ごめんさい。ちよつと冒険者の知り合いに会っちゃったもので……」

「いえいえ、構いませんとも。むしろ、コロネさんと親しくしている冒険者の顔と名前という、思わぬ良い情報が手に入ったことを喜んでおります」

「またベルオウンでクエストを発注する際には、先ほどの方々にもお声がけするのも良いかもしれませんわね」

ドルートさんとジェリーナさんは、柔和な笑みを浮かべていた。

気分を害した様子はないので、ほつと一安心。気を取り直して、馬車と向き合った。

「では、こちらからどうぞ。今から王都まで向かいますので、道中の護衛を何卒よろしくお願いいたします」

「はい、任せてください!」

わたしは馬の手綱を握る御者の人にも挨拶をしてから、皆と共に馬車へと乗り込むのだった。

○ ○ ○

馬車が揺れる。窓からは雄大な草原が見え、その背後には《魔の大森林》が横たわるように果てしなく広がっていた。

「街を出たらいっつ魔物が襲ってくるか分からないから——バリア魔法、発動!」

魔力を消費してバリア魔法を行使。

今回は護衛ということで、馬車の周囲をコーティングするように防御能力を高めた強靱なバリアを展開する。と、わたしの対面に座るドルートさんが不思議そうな目を向けてきた。

「一体何をされたのですかな?」

「馬車の周りにバリア魔法を発動しました。万が一、魔物の不意打ちを食らった場合に被害が出ないように」

「バリア魔法ですか! 防御系の魔法が使える方がいらつしやると心強いですな」

「もちろん、もし強力な魔物が出現した時はわたしが対処しますけどね。それに、他のパーティーメンバーも見張ってくれますし。サラ、魔物を見つけたら教えてね」

「ぶるんっ!」

サラは、任せて! と言うように力強く震えた。

ドルートさんの隣に腰を下ろしているジェリーナさんが口元に手を添えながら笑う。

「あらあら、可愛らしいスライムですわね。従魔、とお聞きしていましたが、スライムを従魔にしている方は珍しいです。何か特殊な力を有しているのですか?」

「そうですね。サラは『解体スライム』っていう種族で、主に魔物の解体と素材の収納を手伝ってくれます。すごく優秀な子で、わたしの自慢の従魔なんです！」

「ぶる〜ん！」

サラは照れるようにもじもじと左右に揺れた。

スライムボディを撫でながら、もう一人のパーティメンバーに顔を向ける。

「ナターリヤちゃん、もし《魔の大森林》から魔物が襲ってきたら、まだ近付いてこないうちに弓矢で迎撃してくれるかな？ 遠距離から倒せるならその方がローリスクだし」

「うん！ ナターリヤ、弓も毎日練習してるから、頑張つて遠くから魔物を仕留めるよ！」

ナターリヤちゃんも魔法で生み出した弓と矢を携帯していて、準備は万全。

つい数日前までは初心者っぽい雰囲気だったけど、ナターリヤちゃんも冒険者業が板についてきた感がある。可愛くて小さい子なのに素晴らしい成長だ。

「ギルドでお話をしていた時から気になっていたのですけれど、もしかしてあなたはエルフさんかしら？」

「あつ、はい。ナターリヤはエルフです！」

そう答えた瞬間、ジェリーナさんは前のめりになって声を弾ませた。

「まあ、やっぱりそうだったのね！ ……あら、ごめんなさい。年甲斐もなくはしゃいじゃって。

エルフの方を見かける機会ってあんまりないものだから、つい」

そう言つてジェリーナさんは恥ずかしそうに身を引いた。

やっぱりエルフは珍しいんだね。

かくいうわたしも最初にナターリヤちゃんと出会った時は生エルフに感動したものだ。

「そう言えば聞きそびれてたんですけど、ベルタウンから王都までって何日くらいかかるんですか？」

「そうですね。私が乗っているこの馬車であれば丸一日ちよつと、といったところでしょうか」

なら、少し長旅になるね。

周囲の警戒は継続しつつ、世間話を続けた。

「ドルートさんたちって王都で商売をしている商人なんですよ？ 一体どんな商品を買っているんですか？」

一口に商人と言つても取り扱っている品物は十人十色だし、密かに気になっていた。

ドルートさんは顎に手を添え、少し考える。

「色々ですね。私の商会では幅広い商品を取り扱っております。良いと感じた製品、素材、品物ではできるだけ多くの人に知ってもらい、世に広めていきたいと考えているのです。それゆえ、冒険者用の装備や食料品、貴族様向けのインテリア商品に、子供が夢中で遊べる玩具、魔物から取れるレア素材の仲介取引など、扱っている品物は多岐に亘ります」

眉を曲げて話すドルートさんに、ジェリーナさんがにこりと笑った。

「ですが、私たちにも目玉商品というものがございますのよ」

「目玉商品、ですか？」

「ええ。一般家庭から貴族様、果てには冒険者や騎士の方まで、老若男女を問わず需要が高い製品——『魔道具』ですわ」

「魔道具？」

その単語に、ナターリヤちゃんが手を上げて反応した。

「ナターリヤ知ってるよ！ 魔道具って、魔力を通したら簡単な魔法が使えるようになる製品のことだよね！」

「ふふふ、その通りですわ。エルフの方であれば、さぞ上等な魔道具をお使いになられているのかしら？」

「い、いえ、ナターリヤは修行に来た身なので、最低限のお金だけ持って着の身着のままベルオウンまで来ました。なので魔道具はアイテム袋くらいしかなかったんですけど……その、大金が手に入ったので、良さそうな物があつたら買いたくなって思ってたんです！」

ナターリヤちゃんも『幻の果実』採取クエストの報酬で、結構な金額を受け取ったもんね。

たしか日本円で一千万円は超えていたはず。

ちなみにわたしも同額をもらっているけど、美味しい料理を食べるための食費にしか使っていないから、まだまだ貯蓄はあり余っている。美食は安くて助かるね！

「ちなみに、魔道具ってどんな効果があるんですか？」

「それは使用する魔道具によって異なりますわね。魔道具といってもその種類も効果も千差万別ですから。実は、これも魔道具の一つなんですのよ」

ジェリーナさんは顔の横におもむろに手を添えた。

すらっと伸びる指には、宝石らしきものが嵌め込まれた高級そうな指輪が輝いている。

「魔道具って……もしかしてその指輪が？」

「ええ。発動するとこの指輪の宝石から強烈な光が発されて、敵の目を眩ませることができのです。それにこっちのネックレスは簡易的な防御魔法を発動することができます設計になっておりますのよ。まあ、どれも数回使用すれば使い物にならなくなってしまふものなのですけれど」

ジェリーナさんは首もとに纏わせたネックレスに指を這わせた。

お金持ちっぽい素敵なネックレスだと思ってたけど、それも魔道具だったとは。

「言わば、軽い護身用ですな。商人たるもの、いつ何時、不躰な輩が襲ってくるとも限りませんから、常に注意をしておかなければ。一応、私も装着しておりますぞ」

ドルートさんも右手に装着した指輪をわたしに向けてきた。

魔道具が目玉商品というだけあって、自分たちも魔道具は肌身離さず身につけているようだ。

なんか話を聞いている限りだと便利そう。

ナターリヤちゃんが、期待を込めた眼差しで少し身を乗り出した。

「あ、あの！ それなら、弓の命中力を上げることができる魔道具とかあつたりしますか？」

「ふむ。命中力ですか……」

「あなた。たしかハイレベルの魔道具であれば似たような効果のものがいくつかあつたんじゃないかしら？」

「いや、あの魔道具はすでに王都の貴族様に全て買い上げられた。さすがに買い手が決まっている商品をお売りすることはできない。ナターリヤさん、申し訳ないのですが現状の在庫的にご希望の効果の魔道具は品切れとなっておりますな」

「そうですか……」

「しかし、だから諦めてくださいとは申しません。商人たるもの、お客様の要望には最大限応えて然るべきですからな」

しよんぼりと顔を伏せるナターリヤちゃん。

しかし、ドルートさんが人差し指を上げて微笑む。

「ずばり、ナターリヤさんから魔道具の作製に必要となる素材を提供いただければ、すぐにお作りすることが可能です。——ナターリヤさん専用の、オーダーメイドの一品として！」

「オーダー……メイド？」

小首を傾げるナターリヤちゃんに、ドルートさんは無言で頷いた。

「魔道具の作製には、魔物の魔石や素材が必要になります。今回ナターリヤさんがご希望されている、命中心力を上げる効果”の魔道具を作製するには、とある素材が必要になります。これの入手が少々厄介なのですが……」

「そ、その素材っていうのはなんなんですか……!?!」

固唾を呑んで尋ねるナターリヤちゃんに、ドルートさんは真剣な面持ちで答える。

「翼竜種の体から取れる素材——平たく言えば、ドラゴンの体の一部、です！」

飛び出してきた言葉にわたしは、ドカーン！ と爆発するような衝撃を受ける。

「ド、ドラゴン!?!」

「はい。命中心力を上げる魔道具を作製するには飛行能力を持つ強力な魔物の素材が必要になります。その代表例がドラゴンです。ドラゴンの体の一部であれば、鱗でも牙でも爪でも、どの部位でも構いません。それを手のひらに乗るくらい量を回収してきてもらえれば問題ないかと」

まさかここでファンタジー定番のモンスターの名前を聞くことになるなんて。

この世界にもドラゴンっているんだね。

ちよつと見てみたいかも。好奇心がくすぐられる。

ただ、一つ気になることはあった。

「でも、やつぱりドラゴンって強いですよね？」

「そうですね。Aランクが平均値で、中にはSランクに到達するドラゴンも珍しくありません。

『亜竜』と呼ばれる近縁種もいるのですが、こちらの素材では効能として不十分ですのでご注意ください」

「ださい」

まあ、そうだよな。

ドラゴンってめっちゃ強そうなイメージがあるから、倒すにしてもそう簡単にはいかないか。

しかも『亜竜』っていう近縁種はNGらしいから、純正の『翼竜種』しかダメみたい。

条件だけ聞けば難しそうだけど、ナターリヤちゃんは挫けることなく顔を上げる。

「わ、分かりました！ それなら、王都についたらドラゴンの目撃情報がないか調べてみますっ！」

ナターリヤちゃんは、ふんす！ とやる気を出していた。  
綺麗なくりくりの瞳が熱く燃えている。

「ナターリヤちゃん……本気なんだね？」

「うんっ！ 領主様にたくさんお金をもらったけど、これまでのナターリヤの生活じゃ使い切るまでに何年もかかっちゃういそうだし。それなら早い内にもっと強くなれるようなことに投資しておいた方がいいかなって！」

「そっか。それなら、わたしも協力するよ！」

「ふるーん！」

わたしはナターリヤちゃんの手をそっと握って、にこりと微笑む。サラも賛同するようにジャンプした。

「コ、コロネお姉ちゃん……！ サラちゃんも……！ えへへ、ありがとうっ!!」

涙ぐむナターリヤちゃんをよしよしした。

だけど、魔道具っていうのは種類が豊富みたいだし、アクセサリー型以外の物もどんなのがあるのか気になる。わたしも興味が湧いてきた。

「そうだ、ドルートさん。もしよかつたら、手持ちの魔道具をいくつか見せてもらったりは——」

できないですかね？ とお願いをしようとした、その瞬間。

ビリッとした緊張感が駆け抜ける。

「ふるん！」

「コロネお姉ちゃん！」

「うん……来るね」

サラとナターリヤちゃんの言葉に、わたしも頷いた。

このざわつくようなプレッシャー……わたしも何度か経験したことがある、魔物に狙われている感覚だ。

車窓から外を確認。《魔の大森林》の一角から、影が伸びる。

「ドルートさん！ 馬車を止めてください！」

「しよ、承知しましたぞ！」

わたしの指示を聞き、ドルートさんは即座に馬車の壁に手をやり、天上部から垂らされる細い糸のような紐を数回上下に引っ張った。

直後、その紐に繋がっている天井に設置されたベルが、ガランガランガラン!! と鳴り響く。

外にいる御者が即座に反応し、馬のいななきと共に馬車が急停止した。

「——早速お出ましか！ 魔物だね!？」

馬車の窓から見える《魔の大森林》から、怪しい影が這いずる。

やがて、その全貌が晒された。

「……シユルル……シユルルウ……!!」

《魔の大森林》からゆっくりと姿を現す、不気味な模様をした細長い生物。

こちらを見据え、くねくねと左右に揺れるようにして移動してくる。

それは——巨大な蛇の魔物だった。

### 第三章 魔物を撃退しちゃう、ぽっちゃり

《魔の大森林》から現れた、一体の刺客。

深緑色の皮膚と白い腹部が印象的で、体長は数メートルは優に超えているだろう。

「コロネお姉ちゃん！ あれ、フォレストサーペントだよ！」

フォレストサーペント？ 初めて聞く魔物だ。一応、わたしの方でも確かめてみよう。

『食の鑑定』、発動！

名称…フォレストサーペント

《魔の大森林》に生息する魔物。

目の前に出現するウィンドウ画面。そこにめちやくちゃシンプルな鑑定結果が表示される。

……そうだったよ。

わたしの『食の鑑定』は特別製で、食材に関しては詳細な情報を提示してくれるものの、それ以外のものに関しては非常に簡素な説明文しか記載してくれないだった。

使い勝手が良いのか悪いのか判断に困るスキルだよ！

フォレストサーペントが細長い舌を忙しなく動かしながら、のそのそと馬車に近付いてくる。

「シュルルウ……!!」

まだ警戒しているのか、相手は緩やかな動きだけど、蛇つて意外と素早いとも聞く。

わたしは即座に行動に移った。

「ナターリヤちゃんは、この場所から引き続き《魔の大森林》を警戒しておいて！ もし他の魔物が出てきそうになったら、遠慮なく弓矢の餌食にしちゃって良いよ！」

「うん！ ナターリヤに任せて！」

「サラもここでナターリヤちゃんと待機ね！ 何かあったらナターリヤちゃんをサポートしてあげて！」

「ぶるんっ！」

ナターリヤちゃんとサラは、力強く了承してくれた。

無論、わたしの役目もすでに決まっている。

「それじゃあわたしは、あの蛇を倒してくるよ！」

その言葉に、ドルートさんとジェリーナさんが驚愕する。

「ほ、本当にコロネさんお一人でいかれるのですかな!？」

「フォレストサーペントと言えば、中堅の冒険者パーティでギリギリ勝てるかどうかといったところ……！ Sランクパーティでも油断はできない大物ですね!？」

へえ、あの蛇ってそんなに危険なんだ。まあ、睨まれただけで結構なプレッシャーを感じるから強い魔物なんだろうけど……わたしの心は落ち着いていた。

けるっとした口調で答える。

「あはは、大丈夫ですよ。あれくらいなら、わたし一人で十分です！」

「し、しかし……！」

「それにこの馬車にも最初にバリア魔法をかけてますから、万が一流れ弾や予期せぬ攻撃が襲ってきて問題ないですしね。外に出たら念のため馬車を覆う形でドーム状のバリア魔法を重ねがけるので、ドルートさんたちは安心してこの馬車の中いてください！」

少々やりすぎなくらいの鉄壁の防御態勢だけど、今回のクエストは魔物討伐ではなく、あくまでも要人の護衛。そのクエストの性質上、用心してもし過ぎることはないだろう。

わたしは気を引き締めながら立ち上がる。

パーティメンバーはわたしの強さを知っているので、引き留めてくることはない。

「気をつけてね、コロネお姉ちゃん！」

「ふるーん！」

「ありがとう！ 二人共よろしくね！」

ドルートさんたちを横目に、素早く馬車の扉を開けて地上に降り立つ。

「しばらくぶりの魔物との戦闘だね。体が鈍ってないといいんだけど」

辺りは草原。

その奥に《魔の大森林》が控えている。

そよ風を肌で感じながら、馬車の外側からバリア魔法をかけた。

魔力も多めに投入し、防御性能を高める。

「シユルルウ……！」

フォレストサーペントは、窺うようにジリジリとわたしの元へ這いずってくる。

もしかしたらわたしの背後にある馬車が目当てなのかもしれないけど、どちらにせよやることは変わらない。

「人が出てきたらすぐに襲ってくるかと思っただけど、意外と用心深いのかな？ だったら、こっちから行くよ！」

先手必勝だ！ わたしは体に魔力を巡らせ、右手に集中させた。

「これでも食らえ！ サンダーボルトッ！！」

わたしお得意の電撃魔法。

突き出した右手から、威力強めの電光が放たれる。

「シユルルウアアアアアアアア！！」

サンダーボルトが直撃したフォレストサーペントは、全身を不規則に硬直させ、痺れる。バチバチバチッ！ と断続的に火花を散らしながら、フォレストサーペントが倒れた。

その衝撃に、かすかに大地が振動する。

「……あれ、一撃で終わり？」



フォレストサーペントは全身からブスブスと黒い煙をあげながら沈黙していた。  
わたしは恐る恐る近づいてみる。

倒れた姿を見るに、やっぱりかなり大きい。全長十メートルはあるだろう。  
人間くらい簡単に丸呑みできてしまいそうな巨体だ。

そうしてフォレストサーペントに近づいていき、歩みを進めていた——瞬間。  
「……………シユルルア!!」

突如フォレストサーペントの眼が光る。

瞬時に尻尾を鞭のようにしならせながら、わたしに攻撃してきた。

死んだふりか！ わたしの元に、横薙ぎの尻尾攻撃が迫り来る。

「一撃で倒れないとは、なかなかタフだね。でも、そんな速度じゃ当たらないよ！」  
魔力を全身に循環。

わたしのもう一つのお気に入り魔法——『身体強化』を発動！  
襲来する蛇の尾を、華麗なジャンプで回避する。

「とうっ！」  
「シユルルア!？」

わたしの足の下を素通りし、空振りに終わる尻尾攻撃。  
驚愕するフォレストサーペントに、余裕の笑みで返す。

この身体強化は非常に便利なので、戦闘中はもちろん、日常生活においても常に発動させている

魔法だ。

そのため、わたしが使用する魔法の中で最も扱い慣れていると言っているといいだろう。力の入れ所や運動神経の強弱、突発的な動作の緩急まで自由自在である。空中で振り上げた右手に、稲妻が迸る。

「一撃で倒れないなら、さらに強力な電撃魔法を食らわせるまでだ！ 特大サンダーボルトオオオオオオオオオッ!!」

「シユルルウウアアアアアアア!!」

空間を軋ませるような雷の轟音と、目を覆いたくなるような稲光。

フォレストサーペントは断末魔の叫びを上げながら、バチバチバチバチッ!! と強化版の電撃魔法をその身に受ける。

数秒ほど雷の餌食になったフォレストサーペントは体を痙攣させながら、再び大地へと倒れた。

わたしも空中で自由落下に身を任せ、地面に着地。

草原に力なく寝そべるフォレストサーペントをちょんちょんと小突いてみるけど、なんの反応もなかった。今度こそ討伐に成功しようだ。

あまりに高威力の電撃魔法を使用したせいか、辺りが少し焦げ臭い。

「ふう、久しぶりの戦闘だとこんなもんかな。フォレストサーペントも倒せたし、サラに来てもらおうか」

わたしの従魔であるサラは、あらゆる魔物を瞬時に解体してしまうスキルを持っている。

しかもその解体スキルはピカイチ。冒険には欠かせない相棒である。

わたしがフォレストサーペントから目を離し、馬車の方へ意識を向けた、その時。

「——っ!？」

ヒュ、と風を切る音が鼓膜を揺らした。反射的にそちらを見る。

視界に映ったのは、《魔の大森林》の一角から突如出現した炎の球体。

それは瞬く間に一直線にわたしの元に接近して。

——ドゴオオオオオオオオン!!

わたしに着弾し、大爆発を起こした。

「コ、コロネさんっ!!」

「コロネちゃん!!」

馬車が停めてある方から、ドルートさんとジェリーナさんの悲痛な叫びがかすかに聞こえた。

炎が命中したから、心配させてしまったかもしれない。

「——まあ、これくらいの炎魔法ならどうってこともないんだけど」

風魔法で突風を巻き起こし、炎も煙もまとめて振り払う。

その場には、無傷のわたしが現れた。

「コ、コロネさん!? ご無事でしたか!？」

「心配させちゃってごめんなさい、ドルートさん。バリア魔法はわたし自身にも展開できるので、大丈夫ですよ!」

魔法攻撃に関しては、先日のマッドブラッディツリー戦でかなり免疫ができた。

あの人面樹はあらゆる属性の魔法攻撃を縦横無尽に繰り出してきたからね。

まあ、今回の不意打ちはちよつとビックリしたけど。

「わたしたちを狙ってる魔物はフォレストサーペントだけじゃなかったってことか。今度は一体何が出てくるのやら」

《魔の大森林》に目を向ける。

炎魔法が撃ち出されたポイントから、ざっざつと草木をかき分けてこちらに向かつてくる足音。

やがて見えた一つの影の正体は——緑色の肌を有した人型魔物だった。

「んん!? てか、あの魔物って……!」

わたしは即座に鑑定を発動する。

名称…ホブゴブリン

《魔の大森林》に生息する魔物。

「ああーっ!! ゴブリンだ! やつぱりあれゴブリンだよ!!」

ホブゴブリンに指を差し、思わず声を張り上げる。

実はわたしはゴブリンと因縁があるのだ。

何せこの世界で目を覚ました時、すでにわたしはゴブリンに捕獲されて縄ぐるぐる巻きにされ

ている状態だったんだから!

たまたまゴブリンに捕らえられて運搬されている道中で目を覚ましたから良かったものの、そのまま目覚めなければ、わたしはゴブリンキングに食べられて意識もないまま二回目の死を迎えていたかもしれない。

「また性懲りもなくわたしを狙ってきたのか! あの時は魔法に慣れてなかったから見逃してあげたけど、今回は手加減しないよ!」

バチバチッと火花を弾けさせ、ホブゴブリンに向き合う。

「ギギイ……!」

ホブゴブリンは不意打ちが失敗し、忌々しそうにわたしを睨む。

と、さらにその背後から足音が響いてきた。

やがて、《魔の大森林》から大勢のゴブリンたちの群れ——ゴブリン軍団が登場する。

「あー、そういえばゴブリンは集団で行動するんだっけ? 前も二十体くらいのゴブリンに囲まれてたなあ……」

嫌な記憶を思い出した。まあ、何体いても関係ない。

ホブゴブリンもろとも、サクッと終わらしてやる。

わたしがゴブリン軍団の元に踏み出した、瞬間。

「疾風弓・貫通の矢!」

背後からナターリヤちゃんの可愛らしい声と同時に矢が発射。

その矢はホブゴブリンの胸に命中し、一瞬にして胴体を貫通した。

「ギシ、シャ……？」

弓矢のあまりの速さにホブゴブリンは何もできず、視線を自らの胸元に下ろす。

ややあって、ホブゴブリンは膝から崩れ落ちるように倒れた。

「コロナお姉ちゃん！ ホブゴブリンの『魔石』は破壊したから、もう大丈夫だよ！」

「ナターリヤちゃん！ ありがとう！」

魔法を扱う魔物には、体内のどこかに『魔石』というコアが宿っている。

それを破壊されると、魔物は即死するという法則があったのを思い出した。

そしてエルフであるナターリヤちゃんは、魔力の素である魔素の流れを視ることができると特殊な瞳を持っているから、魔物の体内のどこに魔石が存在しているのか把握することができるのだ。

今回のホブゴブリンは、胸に魔石があったらしい。

「ギシシッ!?」

「ギシャ、ギシャアア!!」

「ギヤシシ……!!」

その他のゴ布林たちに動揺が走る。

厄介な魔法を操るホブゴブリンは消えたから、あとは雑魚狩りだね。

「面倒だからまとめて吹っ飛ばすか。じゃあちよつと魔力多めの範囲攻撃魔法でも撃ち込んで、つと！ —— スパークリングボルト!!」

発動した電撃は投げ槍のようにゴブリンの群れに着弾し、一帯を激しい稲妻が襲う。

「ゴッシシャアアアアアアアア!!」

ゴ布林たちの断末魔の叫びが重なり、やがて沈黙。

嵐のような電撃がやむと、破壊された草木と共に地面に倒れる無数のゴブリンの亡骸があった。

「ま、こんなもんかな」

念のため周囲を警戒してみるけど、他に魔物の影はない。

全ての魔物を撃退したと判断し、わたしは馬車で待つ愛しの従魔を呼んだ。

「サラー！ もう大丈夫そうだから、こっちに来て魔物を回収してくれる？」

「ふるーんー！」

馬車の窓から、ぽよん、とスライムが飛び出してきた。

直後、わたしが倒したフォレストサーペントや、ゴブリンの群れを手早くスライムボディに吸収していつてくれる。

「でも、襲ってきた魔物の中にドラゴンはいなかったなあ。もしドラゴンが出てきたらトントン拍子で魔道具作製の件が進んだんだけど……」

そう都合よくはいかないらしい。

わたしは短く息を吐いて、意識を切り替える。

「ま、どっちにしる襲ってきたら倒すだけだから、やることは変わらないんだけどね」

ほどなくして魔物回収を終えたサラを連れて、わたしは馬車へ帰還するのだった。

## 第四章 サラの隠された能力に驚いちゃう、ぽっちゃり

魔物を撃退してから数時間後、馬車は順調に陸路を進んでいた。

そして、気付けば太陽が傾いてきている。

「——今日はこの辺りで止めておきましょうか」

ドルートさんの指示で、馬車が止まった。

もう夕方だし、このまま夜間の走行に入ると危険だもんね。

「そう言えば、お二人は野宿用の寝具などはお持ちですか？」

え、寝具？

「ナターリヤは、寝袋を持っています！ エルフの森からベルオウンにやってくるまでに、何度か野宿をしたので！」

ナターリヤちゃんは巾着きんちやくのようなアイテム袋から、丸めて圧縮された寝袋を取り出した。

……ヤバイ、わたし何も持ってないんだけど。ていうか、寝袋とか完全に失念してた。

今まで宿で寝泊まりしてたし、食料はアイテムボックスの中に入ってるし、入浴や歯磨きや洗濯は『クリーン』の魔法で完全に対応できるから、旅先で必要になるお泊まりグッズとか全く考えてなかった！

……まあ、これは仕方ないか。

今日一日くらいなら、寝袋なしで馬車の席に座ったまま寝るとしよう。

夜行バスだと思えば耐えられなくもない。

「おや、コロネさんは？」

「いやー、実はわたし寝袋とか持ってきてなくて……。今日はこの馬車で座って寝ようかと思いません」

わたしは苦笑しながら答える。と、ドルートさんが目の色を変えた。

「なんと、そうでしたか！ それでは、私が持っている寝袋型の魔道具をお使いください！ 素材の質にこだわっているのはもちろん、微弱な炎の魔法によりじんわりと温かく、寝心地もバッチリですよ！」

「え、いいんですか!？」

「無論です！ それに、これは私の商会で販売している品になりますので、商品の宣伝にもなりません。気に入られましたら、ご購入をご検討いただければ」

ドルートさんは手を揉みながら柔和な笑みを浮かべる。

試しに使わせて消費者の購買意欲を刺激しようとは……！

でも、今回はありがたい申し出なのでお言葉に甘えることにしようかな。

「ぷるん！」

膝に乗せていたサラが、ぽよんと跳ねて飛び上がった。